

## 充実した地域子育て支援活動をめざして

～地域子育て支援室の実践から～

本 村 弥 寿 子

Full childcare support for parents:

A practice by regional childcare support center of Nagasaki Women's Junior College

Yasuko MOTOMURA

キーワード：子育て支援 わくわく講座 ノンプログラム型子育て支援活動

### 1. はじめに

本学の地域子育て支援活動は、今年度で3年目となった。昨年度までの2年間、附属幼稚園や地域との連携を目指す取り組みを構築したり、附属幼稚園が実施している子育て支援活動「わくわくクラブ」を活用した、支援講座・情報提供・子育て相談等を実施したりしてきた。特に、支援講座・情報提供・子育て相談等に関しては、「わくわく講座」と題して、本学「地域子育て支援室」が主担当として計画してきた。

今年度の「わくわく講座」の活動内容を計画する際、「地域子育て支援室」の課題である「専門性の高い指導陣の確保」や「学生ボランティアの拡充」のほか、子育て中の保護者が興味を持って気軽に参加できる内容にも重点を置いた。というのも、これまで講座に参加してきた複数の保護者との懇談から、保護者は「わくわく講座」を“楽しく参加できるもの”“息抜きができるもの”であることを望んでいることが見えてきたからである。こうして今年度は、大学の専門性を生かして子育てに必要な知識を伝えたり、保護者の悩みや迷いを解消する手助けをしたりするとともに、子育て中の保護者がゆったりと過ごすことのできる活動内容を計画した。

### 2. 平成25年度「わくわく講座」の取り組み

人間関係の希薄さが社会的な問題となって久しい。子育て中の親も、自分から進んで仲間を作ることができず、孤立して、様々な子育てに関しての悩みを抱えた状態である。本学の子育て支援活動がこのような親たちの支えとなるには、まずは、保護者が「わくわく講座」に参加してみたいという気持ちを持つことが必要である。さらに、「わくわく講座」で学んだことを、親自身の生活の中に取り入れられるような身近で親しみやすい内容であることも大切である。

そこで、今年度、ハンドマッサージを取り入れリラックスできる時間を作ったり、悩んでいる保護者が多いと考えられる子どもの「食」や「ことば」についての講座を開設したりした。さらに、



## 平成25年度「わくわく講座」計画

(於長崎女子短大附属幼稚園)

	日 時	内容及び講師
1	6月6日(木) 11:00~12:00	開講式 ----- 「お話出てこい」 時津町立時津図書館 司書 豊島亮子
2	7月11日(木) 11:00~12:00	「ハンドマッサージで ストレスを吹飛ばそう」 介護福祉専攻 講師 植木明子
3	9月26日(木) 11:00~12:00	「子どもが喜ぶお弁当」 食物栄養専攻 助教 野村幸子
4	10月31日(木) 11:00~12:00	「命の誕生そして育ち」 幼児教育学科 講師 滝川由香里
5	11月21日(木) 11:00~12:00	「子どものことばの 育ちについて」 長崎市障害福祉センター 言語聴覚士 高橋理恵
6	12月19日(木) 11:00~12:00	「親子で元気に遊ぼう」 幼児教育学科 教授 下釜綾子
7	1月23日(木) 11:00~12:00	「歌は命をはぐくむ」 幼児教育学科 講師 中村浩美 ----- 閉講式

今一度、我が子が生まれたときの感動を思い起こし、子どもがいかにかけがえない存在であるかを感じられるプログラムも考えた。

以下に、今年度の「わくわく講座」の取り組みの様子について述べる。

### 2-1 講座の様子

#### 2-1-1 「お話出てこい ～ほんのひととき～」

豊かな親子の触れ合いの時間となる絵本の読み聞かせについて、図書館司書を招いて開講した。3冊の絵本を実際に読み聞かせ、絵本の魅力や読み聞かせをするときに大切なことをわかりやすく伝えてもらった。

日頃から、地域の親子に絵本の読み聞かせを行っている講師であるため、絵本の内容・読み聞かせ方などとても心にしみわたるものであった。参加した親子は真剣に見入っており、保護者の中

には、感動して涙を流している人もいた。保護者から、「忙しいからと後回しにせず、『ママ、読んで』と子どもが来たときに読み聞かせたい」「心を込めて丁寧に読んでやりたい」などの感想が出された。読み聞かせのポイントと共に、子どもの心を育むために絵本がいかに大切かということを学んでいたようであった。

#### 2-1-2 「ハンドマッサージでストレスを吹き飛ばそう」

子育てで忙しい日々を送っている保護者に、リラックスできる時間を提供しようという考えで取り入れた。講師として、本学介護福祉専攻の教員を依頼し、本学の介護実習室で行った。内容は、様々なストレスとその原因について、そして、ストレスの対処の一つとしてアロマセラピーの講話とマッサージの実践であった。実際のマッサージは介護福祉専攻の学生約20名が行った。

介護福祉専攻の学生には子育てを終えて入学したものが多く、参加した保護者は子育ての経験談を聞くこともでき、とても実りのある時間になっていた。表情はとても穏やかだったことから、約1時間であっても自分の時間を持つことは、子育て中の親にはとても大切なことであることが分かった。

この講座の間は、参加した保護者にゆったりと過ごしてもらうため、子どもたちを別教室に預かった。保育者は、本学附属幼稚園の担当教諭2名に加え、学生ボランティアが15名であった。

子どもにとっては慣れない場所であったため、予想した通り不安から泣き出す子どもがほとんどだった。附属幼稚園から持ってきた玩具のほか、本学の授業で使用する遊具類も準備して環境を整えたが、子どもたちの不安感を取り去ることは困難であった。

しかし、この経験から、学生は、子どもとのかわり方について学ぶものがあつたようである。幼稚園や保育園での実習で得たことを実践し合い、互いに良い刺激を受けたと、後に感想を述べていた。

一方、本学も多くの課題に気付くことができた。

その第一は、未就園児が使用できる用具や遊具等がないということである。子育て支援活動を行う際、主に附属幼稚園で行っているが、講座の内容次第では大学で行うことも出てくるだろう。その際、子どもが安心して楽しく過ごせる場所を整えることが必要である。保育を学ぶ場であることから、乳幼児用の机や椅子、遊具等をそろえていきたいと考える。



を欲している。さらに、アレルギーを持っている子どもが急増している中、その対応について苦慮している保護者もいる。そこで、本学の食物栄養専攻から講師を招き、子どもの弁当についての講座を開いた。

講座の内容は、弁当の役割や弁当箱に詰める量、調理の留意点や毎日続けられる工夫など、基本的でわかりやすいものであった。参加者は、何度もうなずきながら真剣な表情で聞いていた。子どもも保護者と共に受講する形であったが、大型スクリーンに映し出される絵や弁当の写真に親子ともに引き込まれ、約40分間、落ち着いて講座を受けられていた。

このような参加者の姿から、子育て中の親が欲している情報を、短時間でわかりやすく端的に伝えることが「わくわく講座」に求められていると再認識できた。保護者の悩みや欲しているものを常に察知し、理解しやすい内容で伝えていく努力や工夫が、子育て支援を行う側に必要である。



### 2-1-3 「子どもが喜ぶお弁当 (アレルギー対応も含めて)」

幼稚園での昼食は弁当であるところが多い。講座に参加した保護者の中には、毎日の弁当作りに不安を持っている者がいる。上の子どもを就園させている保護者でも、どのような内容の弁当にすべきか迷っている人が少なくない。特に近年、食育について取りざたされることが多く、食の大切さを理解した保護者ほど子どもが喜んで食べ、必要な栄養が適切に摂取できる弁当についての情報

### 2-1-4 「命の誕生そして育ち (助産師の目から)」

命が誕生する場面は感動的である。我が子が誕生するときは、その感動は一層大きなものである。しかしながら、毎日の子育てに追われ忙しく動き回っているほとんどの親が、その感動を忘れていることであろう。子育てに悩みを抱えた親であれば、目の前の我が子が憎らしく邪魔な存在にさえ思えてしまうだろう。本学の子育て支援活動に参加する保護者には、そこまで大きな悩みを抱えて

いるものは見受けられないが、出産の喜びや我が子の愛おしさを改めて思い起こしてほしいと思い、本学の幼児教育学科の講師により開講した。

命の始まりから出産までの胎児の成長の様子を、写真をスクリーンに映し出して講座を進めていった。“何もできない、なんの力もない”と思われる胎児が、実は生きるための力を備えた存在であり、母親のおなかの中で懸命に生きていることを知り、参加した保護者は大きくうなずきながら納得した表情でいた。我が子が誕生した時のことを思い出したのか、膝にいる我が子を、目を潤ませながら撫でる保護者の姿もあった。子どもたちも、写真を見ながら「赤ちゃん、かわいい」「ちっちゃいね」などと母親に話しかけながら興味深げにスクリーンを見ていた。

参加者の一人が、「子どもがそばにいることが当たり前であり、“もっと大きくなれ”“もっと上手になれ”と子どもに望んでばかりいたが、子どもが元気でここにいることが自分にとって一番の幸せなのだ気付いた」と話していた。保護者にとって、子どもとの向き合い方に気付かされる講座になったようである。

#### 2-1-5 「子どものことばの育ちについて」

「うちの子は、なかなか言葉が出ない」「発音がおかしい」など、子どものことばについての保護者の悩みはよく聞かれるところである。そこで、長崎市障害福祉センターから言語聴覚士を招き講座を開いた。

日頃から多くの人にかかわり、言葉を育てている言語聴覚士であるため、事例を含めてわかりやすく話をされた。子どものことばを育てるためには、特別なことではなく、日頃の生活を見直して環境や言葉掛けなどに工夫をしていけばよいということであった。参加者からは、日常の生活での心がけで、豊かな言葉を育むことができることに気付かされ、とても勉強になった等の感想が出された。

この会は、8人の学生がボランティアとして子どもの対応に加わった。保護者が大変興味を持っている内容の講座であるが、子どもには意味の分

からない退屈な話である。途中で動き回ったり泣き出したりすることが大いにあると考えられたため、ボランティアを募ることとした。このことで、子どもたちは大騒ぎすることなく最後まで会場で過ごすことができた。参加者も、親のそばにいることに飽きた我が子を追い掛け回す必要がなくなり、最後まで講座に集中できた。

講座の最後に質問コーナーを設けたものの、講師への質問は特に出なかった。しかし、講座終了後、5名の保護者が進んで講師のもとへ行き個別相談していた。やはり、子どものことばに関しての親の関心は高い。講座を定期的に取り入れる方向で検討したほうがよいと考える。



#### 2-1-6 「親子で元気に遊ぼう」

昨年度同様、親子で楽しめる運動遊びを、本学の幼児教育学科教員を講師として開講した。親子でふれあいを楽しむ手遊びや新聞紙を使った遊びに加え、他の参加親子ともかかわりが生まれる簡単な鬼ごっこも取り入れたものだった。

今年度の講座も後半となり、参加親子が互いに顔なじみとなった時期であるため、鬼ごっこはとても盛り上がっていた。また、遊びの紹介にとどまらず、家庭で取り入れやすいように講師が解説を交えるなどした。どの家庭にもある身近な器具を使用しての遊びが紹介されたため、参加者は感心した表情で解説を聞き、遊びに喜んで取り組んでいた。

手遊びなど、歌いながら遊ぶ活動はまだ遠慮がちな保護者が多い。歌が出てこないのである。体

を動かすことに集中すると声を出すことがおろそかになるのだろうが、思い切り声を出すことも是非取り組んでほしいと思う。



### 2-1-7 「歌は命をはぐくむ」

本年度最後の講座となる。講師は、本学幼児教育学科の教員である。歌を通して親子でふれあいながら、存分に声を出して遊ぶ活動を計画していきたいと考えている。

## 2-2 取り組みを振り返って

### 2-2-1 講座全体から

終了した6回の講座全て、参加した親子は15組前後であった。回によって人数が大きく変化した昨年度と比較すると、参加人数が安定していた。そして、毎回の講座がとても充実したものになっていたと感じる。実際、参加した保護者から、「勉強になりました」「今日、(講座に)来てよかったです」と満足した表情で私たち支援者に話しかけ

る保護者の姿が多く見られた。

そのように感じる理由は、まず第1に大学の専門性を大いに生かした講座内容であったことだろう。長崎市のなかでも、大学と連携して子育て支援活動を展開している保育機関は確認していない。保育者を養成している大学が附属幼稚園と連携して活動している点は、子育て中の親に快く受け入れられている。次に、参加した親子が15組前後ということで全体が把握しやすく、講師と参加者が近い距離で話すことができ、互いに親しみを持ちやすい状態だったことが挙げられる。また、子どもが少々騒いでも周囲に大きく広がらず、講座の内容が全体に伝わりやすくもあった。さらに、同じ親子が何度も参加することで、参加者同士が顔なじみになり、かかわりが多く見られた。昨年度、講座を開講する私たちが参加者に身に付けさせたい力と考えていた“参加者同士繋がり合うこと”が、今年度少しずつ見られるようになってきたのである。この姿は、私たちにとってとてもうれしい「わくわく講座」の成果である。このように今年度の講座が充実していたことを考えると、講座1回の参加人数が約15組というのは、適当な人数だったということではないかと考える。

今年度、親子でともに話を聞く講座も増やした。約50分間子どもが講座に参加できた理由として、講師が内容を子どもでも関心が持てるようなものに工夫したことが挙げられる。それに加え、私たちの保護者への教育活動も功を奏したのではないかと考えている。それは、以前、講座中に子どもが騒いでも親が何の手も打たずにおり、そのような親の姿を疑問に思うことがあった。親は自分が話を聞くことしか頭になかったり、どのように対応すべきかわからなかったりしていたのだ。そこで今年度、講座の初めに「子どもは膝に座らせる」「騒ぎ出したら会場の外に出るなどして周りに迷惑を掛けない」等の注意事項を伝えるようにしたのである。このことも、参加者が落ち着いて話を聞ける状態を作る一助となり、充実した講座であったと感じられるようになったのだと考える。

昨年度に比べ、講座への参加人数は減ったが、それで充実した部分が出てきた。この充実感をさ

らに高めるような取り組みがこれから求められると考えている。

## 2-2-2 ノンプログラム型

### 子育て支援活動から

昨年度、吉村真理著、「家庭支援論」を参考に、「プログラム型子育て支援活動」と「ノンプログラム型子育て支援活動」を取り入れた本学の子育て支援活動について見直しを行った。プログラム型子育て支援活動とは、子育て支援活動に参加した親子が楽しめる企画を支援者が計画して提供する活動である。「わくわく講座」は、プログラム型子育て支援活動である。

一方、ノンプログラム型子育て支援活動とは、活動のプログラムを特に用意せず、親子がゆったりとした時間を過ごす場を提供する活動である。今年度は、講座の前後、つまり、講座に参加する親子が来園して揃うまでの時間と、終了して帰ってしまうまでの自由な時間を、「ノンプログラム型子育て支援活動」を行う時間として位置付けた。主に、本学附属幼稚園の担当教諭2人が環境を構成し、参加した親子が自由に過ごせるようにした。教諭も親子もゆとりのある気持ちで過ごせる時間であるため、気軽に声を掛け合って雑談をしたり、相談したりできていた。初めは、講座のことを考えて、会場であるプレイルームの壁側に遊具を置いていたが、徐々に中心付近にも遊具を整えるようにし、プレイルーム全体を使って過ごせるようにしていった。このことで、子どもが活発に動いたり、周囲に惑わされることなく集中して遊べるようになったりした。ほんの30分ほどの時間であるが、ノンプログラム型子育て支援として充実した時間を過ごせるようになってきたと感じている。このような時間に参加者が教諭や本学の講師と話をして互いに慣れることができたため、講座での諸注意が浸透したり講師への相談がしやすかったりしたのではないだろうか。今後も、ノンプログラム型子育て支援活動をさらに充実させていくことが、本学の地域子育て支援活動を発展させるために必要であると考えられる。



## 3. 課題

### 3-1 一層充実した講座を

子育て中の親たちが求めている情報を提供する子育て支援活動でなければ、参加者は満足感や充実感を得られない。つまり、地域の子育て中の親は何を求めているのか、どのような子育て環境を求めているのか等を私たち支援者が常にリサーチしていかなければならない。これまでは、年度末にアンケートをとったり参加者との雑談や講座の最後に感想などを聞き出したりして情報を集めてきた。確かに、雑談は緊張感や遠慮がさほどないので保護者の本音が聞き出しやすい。今後、多くの参加者に進んで話しかけるなどして、様々な親のニーズを得ることが、子育て支援活動を充実させることにつながるだろう。

### 3-2 参加者を増やす

参加人数が約15組は適当ではないかと考えた。しかし、私たちは、できるだけ多くの子育て中の親を支援したいと考えている。そのために、一層広報活動を充実することが必要である。本学や附属幼稚園のホームページのほか、地域に発信する機会が多く持てるよう工夫したい。仲の良い保護者同士の情報交換、いわゆる口コミも大きく影響する。本学の「わくわく講座」に参加した保護者が満足すれば、その情報は広がっていくだろう。そのためにも、先に述べたように、活動の内容を充実させることが重要である。

### 3-3 本学と附属幼稚園の連携を密に

「わくわく講座」は本学の地域子育て支援室で計画し、講座前後の時間、つまりノンプログラム型子育て支援活動の時間は、附属幼稚園の担当教諭に任せている状況である。しかし、ノンプログラム型子育て支援活動を充実させるために、本学と附属幼稚園という支援者側が連携をとり、計画・実践・見直しをともに深めることが必要であることが見えてきた。それぞれの業務で日々忙しいが、話し合いの機会を持つよう努力すべきである。



### 4. おわりに

本学に「地域子育て支援室」を設けて3年間、附属幼稚園の子育て支援活動と共に活動を進めてきた。共にとはいっても、十分な共通理解をしたうえでの取り組みにはまだ達していない。子育て支援活動の目的を明確なものとし、子育て中の親のニーズを的確にとらえ、具体的にどのような活動を行っていくのかは、より密度の高い本学と附属幼稚園との連携が不可欠である。地域の子育て支援活動のセンターとして本学が役割を果たし、充実した子育ての環境を整えていくために、一層の努力を行いたい。



今年度中ごろから、福祉面・保健面からも子育て支援活動を充実させるべく、幼児教育学科の教員2名を新しくスタッフとして加えた。このことにより、保護者からの相談に専門知識を生かして一層的確に対応できるようになった。次年度も、計4名の本学スタッフで活動をすすめ、子育て中の保護者とその子どもを多面的に支えていきたい。

### 引用・参考文献

- 1) 2011年「家庭支援論」吉田真理 萌文書林
- 2) 浦川末子 長崎女子短期大学紀要第36号 p30~36 (2012)
- 3) 浦川末子、本村弥寿子 長崎女子短期大学紀要第37号 p53~60 (2013)